

特集

「いつも」と「いつか」はつながっている  
札幌×女性×震災

公益財団法人せんだい男女共同参画財団

加藤志生子さん

りぶる

さっぽろ

春

49

2019 Vol.



# いつもといつかは つながっている

札幌 × 女性 × 震災



「りぷるさつぽろ」の特集テーマをもとに、市民の方々と議論を交わす「りぷるサロン」。第3回は平成30年9月に起きた北海道胆振東部地震で女性が抱えた課題に焦点を当て、平成31年1月24日に講演会&パネルディスカッションを実施しました。その模様をお伝えします。

## 「よりよく生き延びる」

講師 公益財団法人せんだい男女共同参画財団 加藤 志生子さん

### 震災後当初の取り組み

私の所属する財団は、エル・パーク仙台とエル・ソーラ仙台という2館の男女共同参画センターを管理運営しています。私たちが、未曾有の大震災であった東日本震災を契機に、どんな思いでどんな取り組みをしてきたかお伝えします。

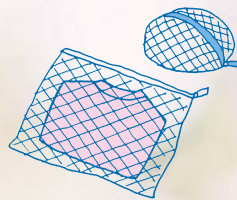
震災が起こった日、平成23年3月11日は職員も被災し施設にも大きな被害が出ました。エル・パーク仙台はスプリンクラーが壊れて2フロアが水浸しとなり、エル・ソーラ仙台はビルの高層階にあるため激しい揺れで間仕切りは倒れ、図書スペースの書架から落ちた本で床が埋め尽くされる状態でした。

震災から約半月後の3月末より「女性の悩み災害時緊急ダイヤル」という電話相談を始めましたが、東日本大震災は津波被害が大きかったため、家を失った親戚など同居するいわゆる震災同居<sup>※1</sup>など、人間関係の相談が時とともに増えていったことが印象に残っています。

ホームページ上では4月より被災女性支援のためのポータルサイトを開設し、支援の情報とともに表に出づらな女性の声を発信しました。このサイトでは「被災者女性に寄り添い、前進を押しつけない」ことを大切に、「頑張れ」とか「一日も早い復興を」というスローガンではなく、それぞれのペースでゆっくり回復していいという姿勢と女性のエンパワメント<sup>※2</sup>につながる支援

情報を提供することにこだわりました。

並行してセンターを拠点とした場の支援を始めました。場の支援とは、ここに来れば誰かに会える、誰かと話せる、人とつながれる開かれた場としてセンターを機能させたことです。人と人とならなること、新しい動きが始まるきっかけともなりました。市民グループも動き出し、避難所の女性たちの声やニーズを拾ってくる中で始まった取り組みが「せんとくネット」です。これはただ洗濯を代行する活動ではなく、被災生活の中のさまざまな女性の困難から見えたニーズを事業化したり、何らかの形で支援団体につないだりする中間支援的な役割を担えないかと考えて始めたものです。「せん」だいの女性たちが、被災した女性の本音を「たく」さんくみ取って、一緒に解決する「ネットワーク」という思いを込めて名付けられました。



せんとくネットではホームページを通じて全国からさまざまなサイズやデザインの下着類を送ってもらい避難所に届ける活動もしました。支援物資で配られる下着は選べないことが多かった中、自分に合ったサイズや好きなデザインの下着を選べることに女性たちはイキイキしていました。「自ら選ぶ」という行為は、日常を取り戻していくのに大切だと感じたエピソードです。女子大学生や専門学校生が主体となって、支援の届きにくい10代の女

の子たちにプレゼントを贈るなどした「ガールズプロジェクト」も、支援される女子中高生たちが前向きになれると同時に、支援する女子大学生たちにとっても力を取り戻すことにつながったと思います。

震災直後はそこにいた全員が被災者で、特に女性は災害弱者として「支援される側」に位置付けられがちですが、一人ひとりができることから少しずつ行動を始め、「支援される側」から「支援する側」に回ることで、自分の持つ力を少しずつ取り戻していったように見えました。

### 決める・動く〜意思決定に女性が参画すること

震災後少しずつ復興していく中で大きな危機感を持ったことは、避難所などでも意思決定の場に女性がいないと、女性の声やニーズが届かない、反映されないということでした。男性だけの会議では、多様な人たちの声がかみ取られないのです。これは今の日常の日本社会そのままで、普段からできていないことが非常時にできるわけもないという当たり前の事実がくぜんとなりました。

このことで、意思決定に女性が参画することの重要性を痛感すると同時に、女性の側も、自分の意思で決めて行動し社会を変える、その力を行使する責任があるのではないか、それを発信していくことも私たちの仕事だと改めて思いました。

震災から4年後の平成27年に国連防災世界会議が仙台で開催され、エル・パーク仙台はパブリックフォーラム「女性と防災」テーマ館になり、国内外から5日間で6千5百人が来場しました。この会議の成果文書である「仙台防災枠組」では、女性も防災、復興、まちづくりを担う多様な主体の一員であるということが明文化され、女性と若者もつとリーダーシップを発揮できるよう全世界で促進していかなければならないとされています。

実際、地域にはさまざまな復興のプロセスで力を発揮している女性がたくさんいます。彼女たちのリーダーシップは従来のけん引型ばかりでなく、下から押し上げる、仲間とつながるなど多様

です。そういう新しく多様な女性リーダーたちが、地域の中だけではなく社会的に評価されるようにする必要も感じています。

そんな思いもあり、平成28年よりNPOや町内会など地域に活動の場を持つ女性を対象にした地域版女性リーダー育成プログラム「決める・動く」をスタートさせました。企業で働く管理職女性向けのリーダー研修はよくありますが、地域で活動する女性にこそ自分らしいリーダー像やマネジメントの視点が必要なのでは、と考えたのです。そこで、研修ではまず自分の強みの生かし方を学ぶことから始めます。またこの研修はNPOなどでミッションを持つて活動している女性と、町内会のように地域で活動している属性も年代もさまざまな女性が一緒に受講しています。ワークやディスカッションをする中で互いの活動を知り、影響し合ったり新しいネットワークが生まれつつあり、これはどちらにとっても大きなメリットとなっています。

「3・11」は、私たちのまちを「被災地」にしました。でもこの日を女性が力を発揮し、社会を本気で変える始まりの日に読み替えていきたい。

本日の「いつもいつかはつながっている」というタイトルは素晴らしいと思いました。今日この後に何が起らないとも限らない、私たちは常に次の災害の前を生きています。だからこそ、今、この日常を変え一緒に取り組んでいきましょ。

※1 震災同居…震災などの被災者が兄弟夫婦や息子夫婦といった親族のもとに身を寄せると、予期しない形での同居が大きなストレスとなり、深刻な人間関係の悩みを抱える人もいた。

※2 エンパワメント…力をつけること。また女性が力をつけ、連帯して行動することによって自分たちの置かれた不利な状況を変えていくとする考え方。



加藤 志生子さん Shioko Kato

公益財団法人せんだい男女共同参画財団 エル・パーク仙台館長兼管理事業課長。昭和62年「仙台市婦人文化センター（エル・パーク仙台）」開館時より相談室、施設管理、図書、講座等の事業に携わる。東日本大震災発生時は、エル・ソーラ仙台管理事業課管理事業係長。平成26年より現職。

いつもとっか  
はつながっている

札幌 × 女性 × 震災

地震の時、札幌の私たちは

**山崎** 東日本大震災の時は、フリーダイヤルの

パープル・ホットラインを行いました。全国のDVシェルターを運営している約70団体によるネットワークである全国女性性シエルトナーネットワークで委託や助成を受けて行った事業です。半年間で6万件を超えるアクセスがありました。

震災当初は、性暴力被害を受けた方がフラッシュバックしてしまうと夜中に電話をかけてくるケースが多くありました。また、震災で子どもだけは安全な場所にとまって預けたら返してもらえなくなってしまう、避難先が男性主導でパワハラを受けてしまった、避難所で加害者と遭ってしまった、などのケースもありました。

DV被害者が加害者と遭遇しないで安心して避難できることが大きなポイントであり、女性専用とか、セクシュアリティに合った避難所などが必要だと思いました。

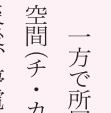
**平井** 山崎さんは全国シエルトナーネットワークのつながり支援をされていましたが、私たちが9月の北海道胆振東部地震の際は、東京の姉妹団体から会員の方に直接食品パッケージを送ってもらい、大変喜ばれました。

東区の避難所であった体育館を訪ねると、中は仕切りもなく、食べ物もアルファ化米とクラッカーと水しかありませんでした。ボランティアが集まったメンバーで、SNSで炊き出しの協力を呼びかけました。体調が悪く買い物に行けない方もいて、やっと温かいも

パネルディスカッション

「札幌の女性と震災」

りぷるサロンの後半は、加藤さんと札幌で女性支援に携わっている3名の方々とのパネルディスカッションを実施しました。



のが食べられたと喜んでもらえました。この避難所は退避所になりましたが、そこに最後まで残ったのはひとり親家庭の方々ばかりでした。災害に遭ったことで、普段何とかわかっている生活が回らなくなったのだと思います。社会的に孤立し、頼れる人や転居の資金もなく、行政との交渉も慣れていない方々が残ったということです。同じ避難所についても個々の状況が違うので、丁寧なケースワークとその後の継続した生活支援が必要で

**柴田** 私はまず震災の個人体験からお話します。震災が起こった直後に、自分を落ち着かせるために家にあつた備えをメモに記し、夫と共有しながら行動しました。当時は6月に息子を出産して育児休暇中だったので、子どもを不安がらせずにいかに生きていくかに集中しました。停電中の夜は、音が鳴り光るおもちゃで親子で踊る真つ暗闇パーティーをしました(笑)。このおもちゃが「こころのお守り」になり気持ちが救われました。また、地震後しばらくしてから震災時の72時間の行動やとっさの行動でよかった点を再度家族で共有しました。

一方で所属する会社は札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)を管理運営しています。震災後、停電のためチ・カ・ホも全面封鎖していましたが、札幌市から要請があり、帰宅困難者のための一時滞在施設として20時45分に全面開放しました。広域停電が続く、帰宅困難者の規模やニーズ把握も難しい中でビルの管理者と意思疎通できたのは、日常のつながりがあったからだと思います。

Panelists  
パネリスト

加藤 志生子 さん

[公益財団法人せんだい男女共同参画財団]

山崎 菊乃 さん [NPO法人女のスペース・おん 代表理事]

女性の人権ネットワークとして、DV被害者の緊急一時保護施設であるシェルターと職場でのセクハラなどに対応する北海道ウイメンズ・ユニオンの運営を2つの柱として活動しています。DV被害当事者の経験や支援現場に関する講演、若年層へのDV予防啓発を行い、女性や子どもに対する暴力の根絶を目指しています。

平井 照枝 さん [しんぐるまざあず・ふぉーらむ北海道 代表]

「ママを笑顔に子どもを元気に」シングルマザーが子どもと共に、生き生きと暮らせるよう支援している団体です。さまざまな団体や機関と連携したひとり親家庭支援のほか、支援者向けの講座やネットワークづくり、情報発信などを通じ、当事者と行政、地域をつなぐ中間支援的な活動もしています。

柴田 末江 さん [まちのこそだて研究所gurumi 研究員]

札幌駅前通まちづくり株式会社所属し、「まちで働く幼い子を持つ、お母さん、お父さん、子どもに関わる全ての人が研究員」をコンセプトに、働きながらどう子育てしていくのかをまちづくりとともに考える事業を行っています。プライベートでは夫と共に3歳、0歳児の子育て中です。



## 多様性を受け入れ、支えあう地域へ

**山崎**

DV被害者の方は男性への恐怖が強く、寝起きする避難所に男性がいるのは負担が大きいため女性用の避難所が必要です。震災時は自分の気持ちを主張しづらい雰囲気になりませんが、しっかりと自分たちが生き延びやすい方法を実行することが必要です。

**平井**

避難した場所で安心できることが大切ですよ。東京の姉妹団体が東日本大震災で支援に入ったときの記録に次の記述があります。「不平等や差別がある社会の仕組みを意識せずに支援が行われるならば、意図せずして特定の被災者により大きな被害を負わせることにもなりかねない」。災害の前から生活上の困難について理解していないと、必要な支援が行われない場合があったように感じます。

**加藤**

DV被害者も、シングルマザーも、地域の中に理解者がいたらいいと思います。避難所は、なるべく早く次の生活に行くための場です。多様な人が受け入れられる普通の地域づくりの延長線上に避難所もあると思います。

**山崎**

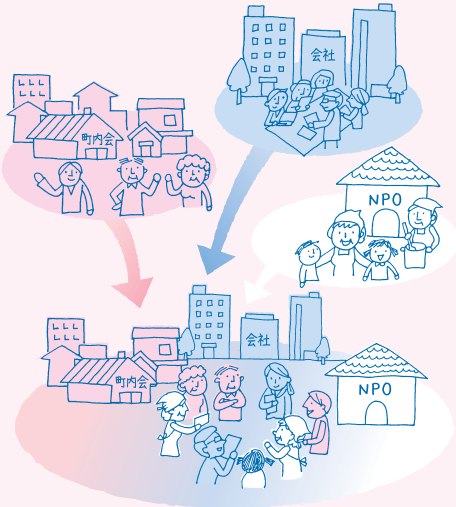
DV防止法※は平成13年に施行されましたが、「加害者を処罰する法律」ではなく、「被害者を保護する法律」です。そのため、これまでのDV支援では、被害者が逃げ隠れし住所も絶対に知られないようにして、地域からも隠すことしかできませんでした。しかし昨今は、地域がDV被害者を守る社会を作るという流れにあります。オランダや台湾など

では、シェルターが公開され地域に広がっていき、地域の人が入れるシェルターもあります。被害者が逃げ隠れするのではなく、地域がDVを許さず、被害者を支えていくということです。

**平井**

災害時の被災者支援は徐々に継続的な生活支援になっていきます。私たちは迷惑をかけないように育てられ、人に頼らないことが自立していることだと思いがちですが、それでは孤立してしまいます。必要な時に助けを求めて人の援助を受ける「受援力」が必要になります。助けをもらう一方ではなく、お互いが支援し支援されることで、自分が必要とされていると感じることが出来ます。地域でこのような関係性をつくるのが、私たちが日常でできることかもしれません。

※ DV防止法…配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律



## 「ミッション縁」と「地縁」

**柴田**

私たちがまちづくり会社の活動はまさに地域をベースにしています。札幌都心部の駅前通りエリアは居住者こそ少ないですが多くの企業や商業施設があり、多様な方が存在します。この地域の魅力・地域価値の向上を図るために、「さっぽろ八月祭」という夏の盆踊りを実施しています。何かあったときに顔が見える関係が一番頼りになると考え、地域を支えるビジネスパートナーと地域で暮らす方々が顔を合わせる場を作っています。祭を一時的なものとして捉えるのではなく、日常のネットワークにつなげていくことを大事にしています。

**加藤**

私たちのセンターで行っている地域の女性リーダー育成プログラムでは、NPOなどのミッションでつながっている人と、町内会など地縁の中で地域のために動いている人たちが一緒に学ぶことで生まれる化学反応のようなものが見えてきました。例えば、学童保育を担っているNPOは、小学校区という地域の中で子どもたちの放課後支援をしながら、親とのつながりを通して地域に根付いています。ミッションを持つ活動している団体と町内会の女性会長とが組織や地域の課題を共有すると、非常に相互理解が深まります。ミッションで集まった人と地域のつながり、つまりミッション縁と地縁を日常からつなげていくことが大事ということですね。いくつかのために備えて、いつもをもう少し豊かにしていけたらと思っています。

## 震災にあった札幌でくらす 女性たちの想い

りぶるサロン《第3回》にお越しいただいた方に、9月の地震のときどんな気持ちだったかお聞きしました。



震災が発生してから1週間くらいがたったころ、通常の生活に戻った人とそうじゃない人とが生まれ、格差を感じた。まだ大変なんだ、精神的にしんどいと言えなかった。

震災後は職場でも備蓄しようという声があったが、男性役職者でしか話し合いがなく、女性への気遣いはなかったように思う。



普段は、ひとり暮らしで地域とのつながりが全くないため、職場に行きほっとした。逆に、職場しか自分のつながりがないことに気づいてしまった。

地震発生後1週間くらいは余震の不安があったが、今はもう過去のことになっている…



### LINE相談から見たもの—

(公財)さっぽろ青少年女性活動協会は地震発生から4日後に「女性のためのLINE相談」を実施、女性の皆さんからさまざまな声が寄せられました。

この相談で印象的だったのは、30代前後の単身女性からのモヤモヤした相談が多かったことです。札幌は、生産人口における女性の割合が高く、特に中央区は単身の女性が多いエリアです。普段、都心部のオフィスや商業施設などで働いている女性たちが比較的職場に近い中心エリアに居住しているということもあるでしょう。日常的には弱者に位置付けられづらい女性たちの声から、何が見えてくるのでしょうか？

【期間】平成30年9月10日(月)～15日(土)

【相談件数】12件

(シングル単身女性から5件、シングル子どもあり女性1件、既婚子どもなし女性3件、既婚子どもあり女性から1件、不明2件)

### LINE相談から見えてきた 震災時のさっぽろ女性たちの一日

30歳女性、マンションの5階にひとり暮らし。札幌駅付近で事務職として勤務。朝3時ごろ、地震に驚いて跳び起きた。停電で水も出なくなった。まだ暗いけれど、会社に行かなければと着替え始めたときに上司から電話が来た。「大丈夫だった？君は職場から近いから、自転車が徒歩でまずは来て。気を付けてね。」返事をした後に子育て中の同僚の顔が浮かんだ。赤ちゃん大丈夫かな…。上の子も怖がってるだろうな。

自転車で職場へ向かった。信号が消えているのに車が動いていて、何だか変な感じがする。職場には課長たちがすでに出動していた。後から同期の職員が数名来た。心配だった同僚は自宅待機になったが、子どもたちも落ち着いていると聞いてほっとした。

結局、一日中仕事はできず、夕方になった。「今日はありがとう、気を付けて帰って。」「お疲れさまでした。」そういえば備蓄とかしてなかったな。最近残業ばかりで自炊もしていなかったから、食料なんてほとんどないはず…。近所のコンビニに寄って行列に並んでいる間、ふと周りを見ると、家族連ればかりだった。いいな、みんな誰かと一緒に。子育て中の人は職場に呼ばれない…。あ、何か今ひどいこと考えてた。私ってダメだな…。

※LINE相談の声を複数組み合わせで作った架空のストーリーです。



COMIC



## 健康で文化的な 最低限度の生活

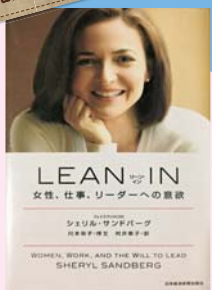
柏木 ハルコ 著

552円(税別)/小学館

就職したばかりの新人公務員・義経えみるが福祉事務所で生活保護を担当するケースワーカー業務に就き、戸惑いながらも生活に困窮した人々を支援していきます。

不正受給、アルコール依存症、シングルマザー、子どもの貧困-著者による現場への徹底的な取材により、生活保護の実態がわかる異色の社会派漫画です。よりよく生き延びるためには、こうした問題の解決が糸口になるのではないのでしょうか。

EMPOWERMENT



## LEAN IN リーン・イン

シェリル・サンドバーグ 著

1,600円(税別)/日本経済新聞出版社

フェイスブックの最高執行責任者が自分のキャリアや家庭生活、子育てをもとに女性のリーダー像や仕事の在り方、男女平等について記した本です。特別なスーパーウーマンの話ではなく、「私なんて…」と思わずに、自分の力を発揮し選択したことに自信を持つこと、思いを主張することの大切さなど、どんな女性にも、もちろん男性にもあてはまるメッセージがたくさん込められています。

NONFICTION



## よりよく生き延びる

—3・11と

男女共同参画センター

公益財団法人せんだい男女共同参画財団 編

1,300円(税別)/新潮社

平成23年3月11日から仙台の女性たちが経験してきたこと、活動してきたことの記録です。次の災害で女性たちが同じような困難に遭わないために、この社会をよりよくしていくための取り組みについて被災直後からその後の女性支援までつぶられています。最後に加藤志生子さんら職員による座談会が収録されています。

SOCIOLOGY



## 災害支一手帖

荻上 チキ 著

1,200円(税別)/木楽舎

災害大国・ニッポン-これからも、私たちは何度も「支援する側」という立場を経験することでしょう。そこで、今後の課題となるのが「支援訓練」です。避難訓練ではなく、誰かを助けるための支援訓練について、お金での支援、モノでの支援、それでもどうにもならない困りごとを解消する小さなアイデアなど、イラストを交えながら実際にあった事例から学べます。本当に必要な支援とは何かが分かる1冊です。

## 札幌エルプラザ情報センターを知っていますか？

札幌エルプラザ内にある「情報センター」では男女共同参画を含めた4分野の資料を閲覧したり借りたりすることができます(ご利用は無料です)。

🌟マークが付いているものは情報センターで借りることができますので、ぜひ遊びに来て下さいね。

情報センターへのお問い合わせは

011-728-1223

(開館時間 9:00~20:00)  
(貸出時間 9:00~19:45)

り  
ふる  
の  
ス  
ス  
メ

このページではセンター職員がおススメする本・映像作品をご紹介します。  
あなたのお気に入りになれたら嬉しいです。

# 札幌市男女共同参画センター相談窓口のご案内

札幌市男女共同参画センターでは相談窓口を開設しています。相談料は無料です。各相談では専門の相談員がお話をお伺いし、秘密は固く守ります。相談内容から浮かび上がった問題は、ジェンダーに関わる課題として市民や行政に投げかけ、男女共同参画社会の実現に生かします。

	日 時	相 談 員	相 談 方 法	相 談 内 容
女性のための 総合相談	第1・3 水 10:00~12:00 第2・4 水 18:00~20:00	カウンセラーなど (女性)	面談／電話 (011-728-1225)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パートナーとの関係や、家庭における性別役割に関わること</li> <li>・セクシュアリティや恋愛、対人関係に関わること</li> <li>・職場や地域における性別役割に関わること</li> </ul>
女性のための 法律相談	第1・3 金 18:00~20:00	弁護士 (女性)	面談	<ul style="list-style-type: none"> <li>・DVや離婚、別居に関わること</li> <li>・職場や地域等でのセクシュアル・ハラスメントなど</li> <li>・性別を理由とした不当な扱い、嫌がらせなど</li> </ul>

**予約受付電話:011-728-1255**  
※完全予約制なので事前にお電話でご予約ください。

## 編集後記

昨年9月、北海道で地震が発生しました。これまで経験したことのない大きな揺れに、札幌でも電気や水が止まり、道路が陥没した所もありました。消えた信号、コンビニの長い列、公共交通機関の分断：一瞬で日常が失われ、札幌も、自分も「被災」した現実、その時は気持ちがついていきませんでした。

本号制作中の2月に再び地震が発生し、札幌市内でも震度5弱を記録しました。恐怖心がよみがえったと同時に、約半年ですっかり9月の地震の時の気持ちを忘れていた自分に呆れました。日常は当たり前ではないと思いついたはずだったのに。

今回のテーマ「いつも」といつかはつながっている「はそんな自分たちへの自戒の念も込められています。いつ来るかわからないいつかのために、まずは女性一人ひとりがいつもの地域で、職場で、家庭で、自分の思いを自分の意思で声にすることから始める、それが日常を変え、未来を変えていくきっかけになるのではないのでしょうか。

## 「りぶるサロン」さよなら平成、さよならセクハラ。性暴力とジェンダー」を開催しました。

平成30年11月23日、札幌市主催「さっぽろ女性応援festival」の分科会のひとつとして、性暴力や働き方、教育などの取材・執筆をされているライターの小川たまかさんをお招きし「りぶるサロン」《第2回》を開催しました。性暴力被害に対する「深刻な誤解」についてのお話では、性暴力は知人からの被害が圧倒的に多いことや痴漢行為は性暴力であるとあまり認識されていないこと、「性暴力」という言葉に対する無意識の思い込みがあることに気づかされた参加者も多かったようです。併せて大幅改定された性犯罪に関する改正刑法についてもお話しいただき、普段触れる機会の少ない情報に「知らなかった」「考えたこともなかった」という声も多く寄せられました。

平成元年に「セクシュアルハラスメント」という言葉が流行語大賞に選ばれて30年、平成最後の年となる今年、「セクハラ」という言葉にサヨナラできなかつたことは残念ですが、一人ひとりが気づきを得られる機会を今後も提供していきます。



発行月：平成31年3月

発行：札幌市男女共同参画センター

【指定管理者：公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会】

facebook： <https://www.facebook.com/pages/札幌市男女共同参画センター/377759212234904>

所在地：〒060-0808

札幌市北区北8条西3丁目札幌エルプラザ内

電話：(011)728-1255 FAX：(011)728-1229

ホームページ： <http://www.danjoyo.sl-plaza.jp>

